



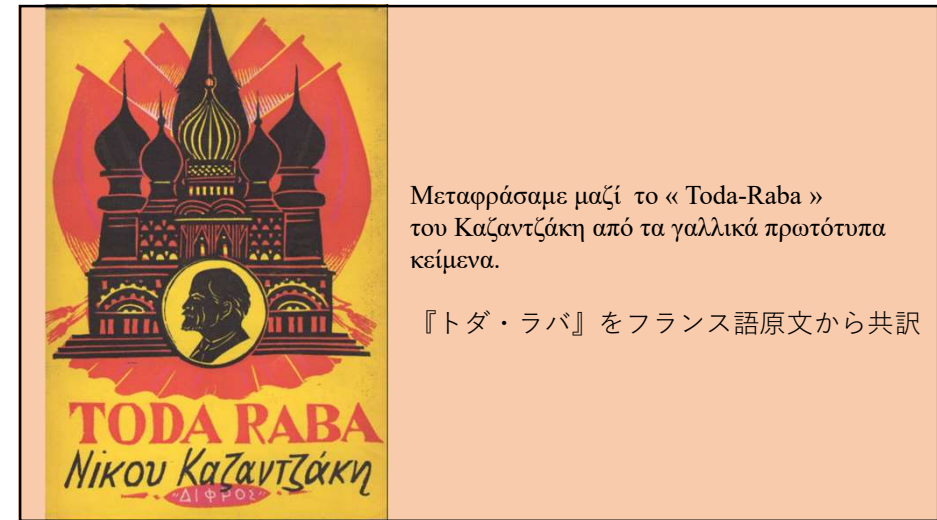
- ・福田耕佑（FUKUDA Kosuke）PhD
大阪大学大学院人文学研究科特任研究員（常勤）
日本学術振興会特別研究員（PD）
- ・吉川弘晃（YOSHOKAWA Hiroaki）
明星大学 国際教育センター 特任講師



- ・駐日ギリシャ大使館後援のもと明星大学内のミニシアターにてジュール・ダッサン監督でニコス・カザンザキス原作の「宿命」上映会とギリシア人難民の歴史に関する講演会を行った。

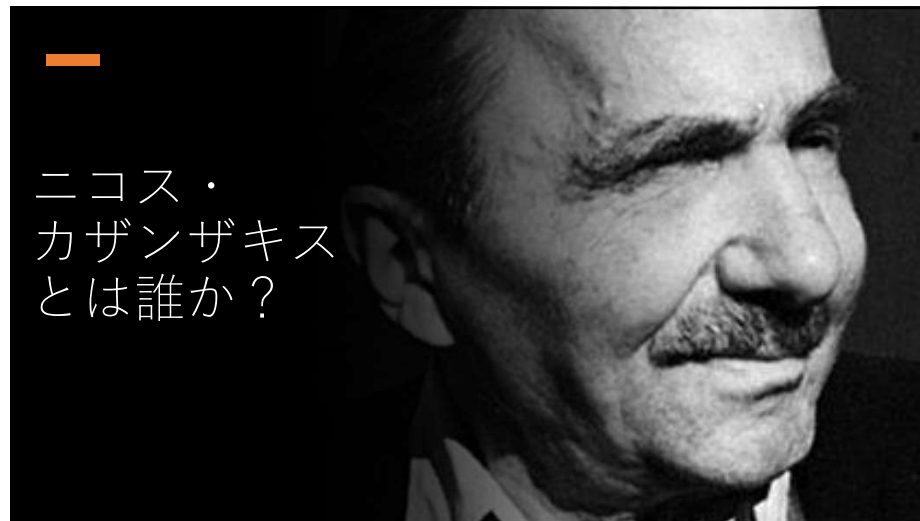


・駐日ギリシャ大使館後援のもと明星大学内のミニシアターにてジュール・ダッサン監督でニコス・カザンザキス原作の「宿命」上映会とギリシア人難民の歴史に関する講演会を行った。



Μεταφράσαμε μαζί το « Toda-Raba » του Καζαντζάκη από τα γαλλικά πρωτότυπα κείμενα.

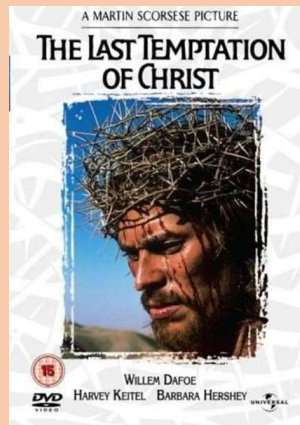
『トダ・ラバ』をフランス語原文から共訳



ニコス・
カザンザキス
とは誰か？

ニコス・カザンザキスの略歴

- ・1883年にクレタ島、イラクリオに生まれる。
- ・少年期に難民、西洋文化との接触を体験し、アテネ大学やパリ大学に学ぶ。
- ・青年期はナショナリズムに傾倒したが、その後は共産主義に傾倒し、ソヴィエトに知識人として招待されるようになるも、最終的にはこれと距離を置く。
- ・ギリシア国内、西欧、中東、ロシア、極東など多くの場所を旅行する。
- ・第二次世界大戦期には飢餓に苦しみ、また左派としての政治活動を行うが、後に渡仏してフランスや西欧で生活する。
- ・1957年、極東旅行で病にかかり、ドイツまで帰ったところで客死。



Δεν ελπίζω τίποτα
Δεν φοβούμαι τίποτα
Είμαι лёгτερος

Je n'espère rien
je ne crains rien
je suis libre

何にも希望を抱かず
何をも恐れない
私は自由だ

カザンザキスの西洋と東洋

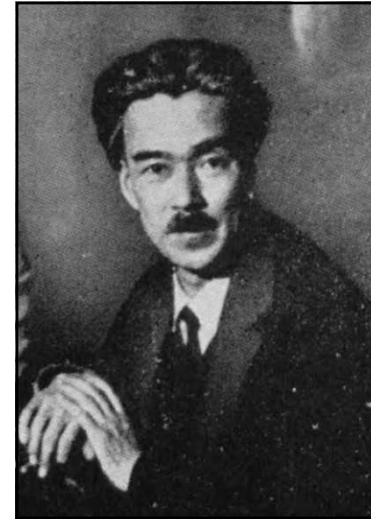
- ・ 福田がギリシアとカザンザキスの作品に関する博士論文において取り組んだ中心的な問題である。
- ・ カザンザキスは西洋の文化に涵養された重要な知識人であり、西洋の哲学者でヨーロッパ人の作家だとみなされている（これは確かに正しい）。

★ しかしカザンザキスはロシアや日本などの東洋の国々を訪れ、この過程で自身の中に乾いたスポンジのように東洋の文化を吸収して同化し、そして新しい物、必ずしもヨーロッパ的でものを創造し得たのだった。

→ 思っているより、カザンザキスと日本のかかわりは大きなものである。

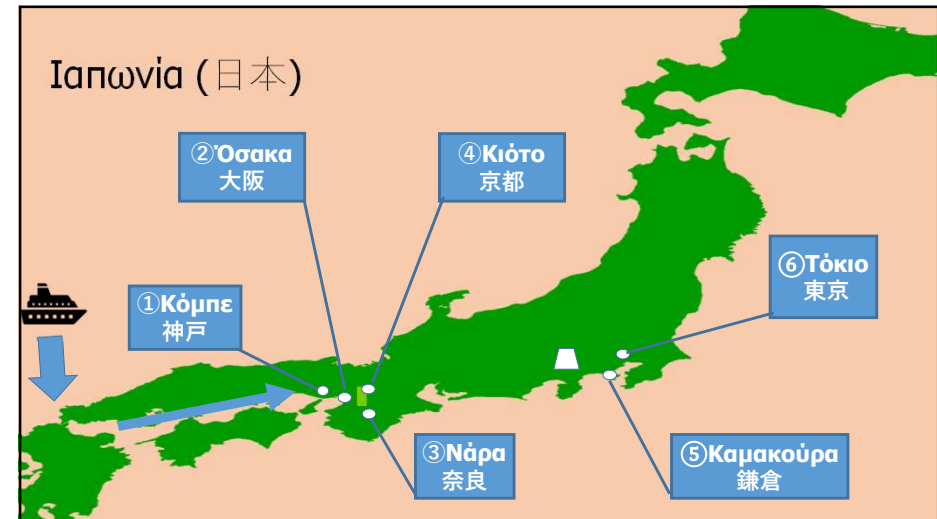
『日本旅行記』以外の カザンザキスと日本の関係

- ・ 1920年12月カザンザキスはソヴィエト・ロシアにおいて、
劇作家で詩人の秋田雨雀と彼の通訳の鳴海完造と出会った。
- ☆カザンザキスのサインがこの二人の日本人の日記に残されている。
吉川先生が発見したが、まだギリシアにおいて発表されていない。
- ・ カザンザキスの『トダ・ラバ』の登場人物である日本人の「アミタ」
『トダ・ラバ』においてアミタは、実際に秋田がカザンザキスに話していた
物語の断片を自分の作品として物語っている。
秋田がカザンザキスにこの物語を話していたことは、鳴海の日記に記録されて
いる。



Ούζτακου Ακίτα (AKITA Ujaku)
秋田 雨雀(1883-1962)

- ・ 劇作家, 詩人
- ・ ソヴィエト10月革命記念十
周年記念式典に列席するた
めにソヴィエトに招待され
た。
- ・ カザンザキスと共に
コーカサスを旅行し、この
経験を書籍にした。



Δρομολόγιο (σταθμοί) του Ταξιδιού στην Ιαπωνία

- ・神戸：神戸港、（旧）外国人居留地、湊川神社
- ・大阪：蚊取り線香の工場（第日本除虫菊株式会社）、大阪城
- ・奈良：奈良公園、東大寺と大仏、春日大社
奈良国立博物館
法隆寺、中宮寺（「慈悲の女神」、観音）
- ・京都：西本願寺、竜安寺、西陣、祇園、皇居、等
- ・鎌倉：鶴岡八幡宮、日蓮ゆかりの地
- ・東京：銀座、浅草、墨東地域（吉原など）

記者としての訪日 ①

- ・カザンザキスは日本に関するジャーナリズム的なニュースに決して触れることがなく、「カティメリニ紙」という新聞の特派員として来日したにもかかわらず、外交政治に関する事件に関して時系列になっているリストを書くこともなく、また何のルポルタージュも残しはしなかった。
- ・例：1935年3月に満州国皇帝の溥儀が来日のうえで昭和天皇に面会し、おそらくカザンザキスはその時東京にいた。
*カザンザキスは一切言及しなかった。

記者としての訪日②

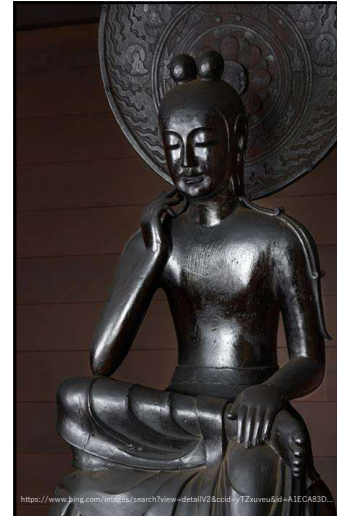
内政面：大変な速度で日本社会におけるマスメディアが発達していったにもかかわらず、政府内においても行政内においても、また一般民衆の日常生活においても表現の自由が厳しく侵害されていた時代であった。*Φασισμός（ファシズム）。

外政面：日本は、台湾や朝鮮、また満洲といった日本の植民地を内に含む、「円ブロック」という自分自身の排他的な経済圏の構築に努めていた。
*Ιμπεριαλισμός（帝国主義）。

☆ カザンザキスはこういった状況をよく理解していたにもかかわらず、『日本旅行記』において言及しなかったのである。

お勧めの場面

- ・「慈悲の女神」の章における、「日本美術の最高傑作である慈悲の女神たる『カンノン』を見てみたくて堪らないのだ」
- ・この像は奈良県の法隆寺の隣にある、中宮寺という「尼寺」に残されている。
- ・この像は「伝如意輪観音」とも呼ばれている。





カザンザキスを日本にいざなった世界史的背景

- 1) 社会経済的条件：WW1以降の東西交通・通信網とツーリズムの発展
(ユーラシアを繋ぐシベリア鉄道／インド洋をつなぐ欧州航路)
- 2) 政治的条件：「西欧の没落」と「東方」の歴史的動態への期待
(ロシア・中国・インドでの革命、雨雀との会見、東亜での日本帝国の台頭)

イメージのなかの古代ギリシアと日本 ①

- ・ カザンザキス『日本旅行記』：古代ギリシア探求の契機としての「日本」像
⇒ 「東方性」に積極的な歴史的起源を付与する役割、
「ギリシア」を問い直す)
→ カザンザキスは、日本を通して古代ギリシアが有していた東方、
或いはアジアの肯定的な側面を見出した。
☆ カザンザキスに関する福田の博士論文の中心的主題
- ・ 和辻哲郎『風土』：アクロポリスの丘から見渡す古代日本の「デモクラシー」
⇒ 日本独自の「文化」に基づいた国民共同体の歴史的条件はどこにある？)
和辻は日本文化に基づいた、日本共同体の本質と歴史的条件を
アテネのアクロポリスを通して見つけ出したのだった！



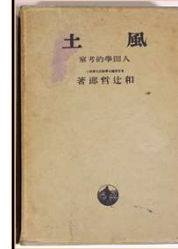
Τετσουρό Ουάτσουτζι (WATSUJ Tetsuro)
和辻 哲郎 (1889 - 1960)

- ・ 東京並びに京都帝国大学の重要な哲学者であり、教授。
- ・ 現代日本における極めて重要でまた哲学的な体系を備えた著作である『倫理学』の著者であり、
また1919年には『古寺巡礼』において仏像などから受けた印象を記した。

イメージのなかの古代ギリシアと日本 ②

- ・ギリシア人知識人と日本人知識人の古代に関する視線が交錯している。
- ・この二人の哲学者に共通な要素とは何か？
 - 1) ニーチェという出発点、2) 古代的共同体と「演劇（祭り）」
 - 3) 古今東西の同化力（日本化）
- ・東西を跨ぐ旅、そして革命下の中国と二人の「東西文化論」のゆくえ
自民族を問い直す契機としての旅、
寄港先での「アジア人」の悲惨な光景

イメージのなかの古代ギリシアと日本 ③



« Το τόπιον: η
ανθρωπολογική έρευνα »
(『風土：人間学的考察』)

- ・和辻（@上海：1927年）

国家権力の秩序のもとで動く欧米・日本人と、
疎開外で無秩序と暴力で生きる中国人を比較。

→ 内なる精神・倫理的な紐帯にもとづいて、
互いに助け合える「国民共同体」を
作っていくべき！

イメージのなかの古代ギリシアと日本 ④

- ・カザンザキス（@一九三五年）
中国の大地で受けた衝撃と違和感（この風土は自分の尺度では
測れないという疎外的感情？）、日本と中国は同じ「アジア」
なのか？そもそも非西欧世界がよってたつ「東方」なんて
成立しないのでは？
- ☆ カザンザキスは両国の愛憎をよく理解していて、彼らの精神的な
壁や互いの違いについてもよく知っていた。
- ☆ 西洋に対抗するための基礎でしかないような、そして何か新しい物や
非西洋的なものの眠っている宝箱のようなものとしてみなされる
だけの「東洋」という概念の存在を疑っていた。



- ・「この女神は、自ら動いて痛みを癒してくる憐れみ深い女神ではない、
と感ずることだろう。不幸な人たちの元に
慰めに行ったりはしない。御座に動かず
座したままで人の心を癒す女神なのである。
存在するだけで、これを見るだけで、
痛みを忘れるのに十分だというわけだ。」

* 極めてカザンザキスに独特な
「カンノン」理解



- ・「……なおそこに女らしさがある。女らしい形でなければ表せない優しさがある。では何であるかー慈悲の権化である。人間心奥の慈悲の願望が、その求るところを人体の形に結晶させたものだ。
わたくしの乏しい見聞によると、およそ愛の表現としてこの像は世界の芸術の内に比類のない独特なものではないかと思われる【...】その甘美な、牧歌的な、哀愁の沁みとおった心持ちが、もし当時の日本人の信条を反映するならば、この像はまた日本の特質の表現である。古くは『古事記』の歌から新しくは情死の浄瑠璃に至るまで、物の哀れとしめやかな愛情とを核心とする日本人の芸術は、すでにその最もすぐれた最も明らかな代表者を持っているといえよう」

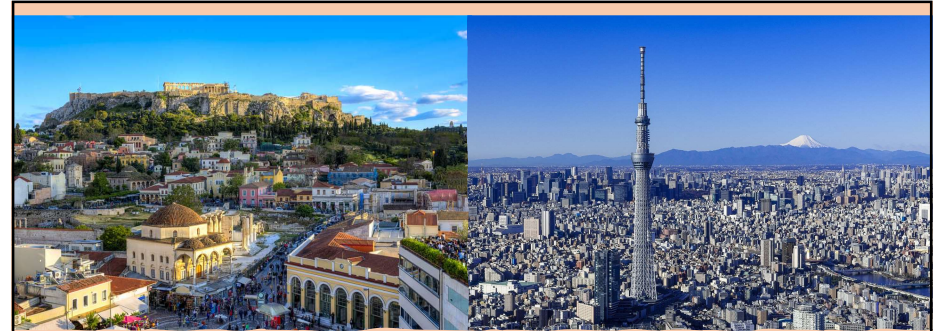
『古寺巡礼』第24章

イメージのなかの古代ギリシアと日本 ⑤

- ・1935年のカザンザキスと和辻の奇妙な精神的経験から学ぶことのできること：
- ・互いに離れた地域の人々は決して理解しあえないということか。そうではない！
- ・「西洋」と「東洋」という壁が世界を分割する現実に対し、それ以外の人々のつながり方を見つけようと試みる努力がいかに貴重であったかということ。

イメージのなかの古代ギリシアと日本 ⑥

- ・「欧米」を「近代」と同一視する偏見はいまなお強いからこそ、それぞれの土地に根ざした人間の生活を尊重しながら、人類が共有できる普遍的な価値を探していくために、日本とギリシアの人々は、新しい思考の旅をはじめめる勇気を、カザンザキスや和辻たちから分けてもらうことができるのではないか。



私たちの
時代のために

より深い相互理解と未来の協働のために、私たちに何ができるのだろうか？

私たちの共通の未来のために ①

- 今の日本人に映る「ギリシア」像のほとんどは、グローバル文化（≒アメリカ資本）に紐づけられた表象に依拠している。
(例：「その男ゾルバ（映画）」、「日曜はダメよ」、「マンマミーア」)
- ★しかしそれだけで真の地域間理解につながるのだろうか？
- こういったものは、ギリシアの真実を描いた表象を与え、私たちの間の相互理解に本当に寄与するのだろうか？
* 同じことはギリシアにおける日本に関しても言えるだろう。

私たちの共通の未来のために ②

- 自然科学や経済といった分野を含む、学術研究ネットワークを私たちの国の間でどのようにすれば構築していけるのかを真剣に考えていかなければならない。
- 学術的側面以外にも、私たちの間でより強固な商業・経済的な関係を構築するために何をなすことができるのかを問い直し、そして両国において相互の観光客の行き来を増やすことができるように努めていくべきである。
 - 例えばシンクタンクを築くところから.....
- 将来的には、互いの国において、ギリシア文化と言語、そして日本文化と日本語に関する学科が設立できれば一番良いのではないか。

